



春風の檻

峰月 伴

1.

桜がハラハラと舞い散る午後、淵上司は自宅療養中の祖父孝の家に向かっていた。桜並木は、今年も満開を迎えていた。

大病院ではないものの、孝は院長として忙しく働いていた。そのせいか、風邪を引きこじらせてしまった。無理して働く孝を見兼ねた司の父豊に、休むように言われ自宅に追いやられた。孝は「豊のやつめ、じじい扱いしおって！」迷惑だと笑いながらぼやいていた。そんな孝を見て司は安心したのを覚えている。

桜並木を過ぎた先に、淵上の家はあった。二階家の日本家屋は古めかしいが、どこか独特の存在感を醸し出している。

「じいちゃん、来たよ」

門を通り抜け玄関をガラガラと引いた。

「司君、こんにちは」

司を迎えたのは、叔父の保だった。

「叔父さん、こんにちは」

保に促されて、司は居間へ通された。

相変わらず何も変化のないこの家が、司は好きだった。歩くとキシキシ鳴る廊下、障子を開け閉めする時の擦れた音は、司の心を安心させてくれる。

「司君、久しぶりだね。いくつになったんだ？」

テーブルに用意されていた湯呑を手に取り、保は司に笑いかけた。

「十五になりました」

「そうか、早いもんだな」

司の前にお茶を入れた湯呑を置いた。

「叔父さんは、今日は仕事ですか？」

スーツ姿の保をちらりと見て、司は湯呑に手を付けた。

「親父に呼ばれてね。まあ、病院の事だからいろいろとね」

叔父の保は病院の経理を担当していると父の豊から聞いていた。だから自宅療養中の孝のいる淵上の家に来ていても不思議ではなかった。

「じいちゃんは部屋ですか？」

「ああ、書斎にいるよ。ただ寝てるなんて暇だって言ってたよ」

お茶を啜りながら困ったように笑った。

「じいちゃんらしいですね」

司もつられて笑った。

「司君はゆっくりしていってくれ。親父も暇を持て余しているからね」

お茶をグイと飲み干して、保はよいしょと言いながら腰を上げた。

「もう帰るんですか？」

「いや、また病院に戻るよ。今度は兄さんに用があってね」

「そうですか」

司もお茶を飲み干した。

病院に戻る保を見送り、司は孝がいる二階の書斎へと足を運んだ。

書斎は北側の奥にあった。少し薄暗いその雰囲気、司は好きだった。

「じいちゃん、入るよ」

軽く扉をノックして書斎に入った。

「おお、司か。待っていたよ」

部屋奥に置かれた革張りの椅子に座っていた孝は、表情を和らげた。今し方読んでいた本を机に置くと、立ち上がり司を迎え入れた。

「風邪はもういいの？」

中央に置かれたソファに座り、孝を窺った。

「ちょっと咳をしていたくらいで家に押し込まれちゃかなわんな。もう、とっくに治まったって言うのに」

孝は司の向かい側のソファに座り、苦笑いをした。

「お前の父さんは心配性だ。だがね、いつまでものほほんと本を読んでもわけにはいかんからな」

司ににこりと笑いかけた。孝は、笑うと目じりが下がる。その顔は年相応のものに見えた。

「叔父さんが言ってたよ。じいちゃんは暇を持て余してるって」

「そりゃそうだ。患者の事が気になっておちおち眠ってなんかいられない」

孝は元気そうだった。何よりも孫の司が来た事が嬉しかった。孫と過ごす細やかな一時を、孝は楽しんだ。

日も暮れて、空は夕闇に染まった。

夕食は、家政婦の美智子がいつも用意してくれている。今日は司が来ているからと、張り切って作ってくれた。

「司君、いっぱい食べて頂戴ね。今日はたくさん作ったのよ」

美智子は嬉しそうに料理を運んで来た。

洩上家にはもう十年も勤めている。だから、司の好みも把握していた。

「ありがとう美智子さん」

司は運ばれて来た料理を次々に平らげた。

「いい食べっぷりだなあ。美智子さんも作り甲斐があるってもんだ」

孝がニコニコと目じりを下げて美智子に声を掛けた。

「ええ、それはもう本当に。嬉しい限りですよ」

「すごくおいしかったよ」

司の満足した顔を見て、美智子は空になった食器を片づけた。全ての食器をいつものように丁寧に洗い、食器棚に戻した。そして、食後に入れたてのお茶を二人の前に運んだ。

「それでは旦那様、私はこれで失礼致します。また明日、お伺いしますので」

挨拶をして、美智子は淵上家を後にした。

「それじゃ、僕も帰るね」

湯呑を洗い、シンク横の籠に置いた。

「おお、気を付けて帰るんだぞ」

孝が立ち上がりかけた時、家の電話が鳴った。家に似合わず、最新の機種を置いていた。たぶん叔父の保だろう。保は古い機種 of 電話を見る度に買い替えるのを進めていた。電話の相手も保だった。

話が長くなりそうな予感がして、司は孝に手を振って玄関に向かった。

――カタン

廊下を歩いていると、微かに物音がした。司は足を止めて耳を澄ませた。

――カタン

また音がした。気のせいかと思ったが、気になり出した司は音を辿る事にした。

今この家には孝と司の二人しかいない。美智子は少し前に帰っている。司は好奇心と少しの不安を胸に抱きながら、廊下を少しずつ歩き続けた。客間を過ぎ、そしてさっきまでいた居間を通り過ぎた。

――カタン

また音が鳴った。さっきよりもはっきりと聞こえた。

音に近づいている。

司は家の奥、かつて祖母の幸恵が使っていた部屋に辿り着いた。幸恵は五年前に病気で旅立った。だから、この部屋は誰も使っていないし誰もいるはずがない。部屋の前で、司は襖に手を掛けた。心臓が激しく脈打つ。気持ちを落ち着かせるように、司は一呼吸付いた。そして、ゆっくりと襖を開けた。

部屋には誰もいなかった。それどころか、シンと静まり返っていた。部屋に入り中を見回したが、何も可笑しな所はなかった。

――ガタンッ

大きな音が鳴った。この部屋から聞こえた。この部屋の下から。

司は自分が立っている畳を凝視した。今、確かにこの下から何かが倒れる音がした。何かがある。

不安が恐怖に変わった。それと同時に好奇心が膨れ上がった。

八畳ある部屋を一つも見落とす事なく調べた。そして、襖側の右奥。畳半畳分が持ち上げられるようになっていた。その畳の扉を開くと、もうひとつ扉が現れた。司は扉を慎重に持ち上げた。そこには下に続く階段が並んでいた。

司は息を呑んだ。

「こんな階段、いつからあったんだ……」

闇に飲まれたように暗い底を見つめて、司は考えを巡らせた。この階段の先には、いったい何があるのか。動物でも飼っているのだろうか。そうだとすると、なぜこんな地下に。

――ガンッ

激しい音が鳴った。その音に引き寄せられるかのように、司は暗闇に身を落とした。階段は思った程段数はなかった。その階段を下りた先には錠の掛かった扉があった。ここに何かがある。

見つめた重厚な扉に掛けられている錠は、外れていた。その外れた錠に司はゆっくりと触れた。その冷たい錠を扉から抜き取った。

今、音は止んでいる。この扉の向こうにいる生き物が、司の気配を感じとって警戒しているのかもしれない。司もまた、警戒している。

錠を外した扉を、司は力を込めて押し開けた。

ギィッと音を立てて開いた扉の向こうは、薄明かりが付いていた。殺風景なコンクリートの部屋は物が投げつけられて荒れていた。そして、扉の近くに蹲っている小さな生き物がいた。

扉の開く音に気付いてそれは顔を上げた。色素の薄い柔らかな髪をふわりと揺らし、涙に潤んだ瞳が司を捕らえた。その瞬間、司は体温が上がるのを感じた。身体の奥が疼き、熱を帯びた。

「……だれ？」

か細い声が聞こえた。潤んだ瞳が司を離さない。

「司……。僕は淵上司だよ」

火照った体を隠すように、司は子猫のように蹲っている幼子の前にしゃがんだ。そして、柔らかなその髪を撫でた。

「つかさ？」

「そう、僕の名前だよ。君の名前は？」

幼子の緊張を解すように髪を、頬を撫でた。

「……みちる」

か細い声が震えた。そして、瞳から一滴の涙が頬を伝った。

愛おしさと独占欲が司の心をいっぱいにした。この小さな生き物が欲しい。司はみちるを引き寄せた。

「寂しかったね。でも、大丈夫だよ。僕がいつかここから出してあげる。今すぐには無理だけど

、絶対に出してあげる」

「だしてくれる？」

「必ず出してあげる。それまでは毎日みちるに会いに来るよ」

みちるは司の腕の中で、寒さに震えるように泣いた。その可憐なか弱い生き物を、優しく抱き締めた。

さむいよ。つめたいよ。さみしいよ。

薄暗い明かりしかないコンクリートの部屋の中で、幼子は大きな瞳を真っ赤にしながらぼろぼろと涙を流していた。

何故、自分がこんな所にいるのか分からない。時間もどれだけ経ったのか知る事も出来ない。部屋には、必要最低限の物しか置かれていなかった。

「ママァ……ママァ。……えんちょうせんせえ……」

子猫のように丸まって、肩を上下に震わせながら嗚咽を漏らしていた。それは小さなその身を守っているようだった。

「だしてよ……ここから、だしてえ」

こわい。こわい。こわいよ。だしてよ。だして。ここからだして。だれかたすけて。

理不尽な恐怖に耐えられず、幼子は手当たり次第に数少ない物を投げ付けていた。それに疲れて、小さな体を小さな手でぎゅうっと抱き締めた。

壊れそうな心で必死に願った。きっと、助けに来てくれる。絵本に出て来た勇者様が、絶対助けてくれる。

――ガチャ

固く閉ざされているはずの重たい扉がゆっくりと開いた。その音に、幼子は顔を上げて扉を見た。見上げた扉の先には見た事のない人物がいた。

「……だれえ？」

幼子はしっかりと目の前の人物を見上げた。

そして、感じた。彼が勇者様だと。

「司……。 淵上司だよ」

柔らかな声で発せられたその名前を、優しく撫でてくれた掌の感触を、決して忘れない。

幼子にとって、唯一無二の存在。

つかさいがい、なにも、だれもいない。

2.

翌日、司は桜並木を足取りも軽やかに歩いていた。桜が風に靡いて舞い踊っている。

昨日、孝の家を出る際に見つけた秘密。もちろん誰にも話していない。何故あんな冷たい地下室に閉じ込められているのか。あの愛らしい少年はどこから連れてこられたのか。

あの家には何かある。そう疑わずにはいられなかった。

「じいちゃん、また来たよ」

玄関を引き開けて、いつものように家に上がった。

「おお、司。いらっしゃい」

玄関に現れた孝はスーツ姿だった。

「あれ？ じいちゃん、どこ行くの？」

孝のスーツ姿は久々だった。それは仕事に行く時の服装だったから、司は少し驚いた。

「どこって、病院に決まっているだろう」

昨日の様子からして、家でのんびりするなんて退屈だったに違いない。だからといって、昨日の今日でもう病院に行くとは司は思っていなかった。

「父さんは知ってるの？ また喧嘩になるんじゃない」

孝と豊は度々ぶつかっている。親子だから遠慮なしに言い争ってしまうのだ、と豊が苦笑交じりで言っていた。

「構うものか！ あいつひとりに任しておれん」

そう言いながら、孝は病院に行った。そしてそれは司にとって絶好のチャンスだった。病院に行ったのなら、孝は夜まで帰って来ない。今、淵上家には司ひとりだけ。これなら、みちると思う存分一緒にいられる。

司は、祖母幸恵の部屋に向かった。部屋の前まで来て襖に手を掛けた時、中から声が聞こえた。そして、階段を上ってくる足音がした。司は襖から身を離して、部屋側の壁に背中を付けて息を潜めた。それと同時に、襖が開いた。

「何やってたの、美智子さん」

襖を開けて出て来た美智子に、鋭く声を掛けた。司の声に驚き、美智子は体をビクッと跳ねさせた。

「つ、司君！ 何故っ、あの……」

美智子は狼狽して、言葉に詰まった。まさか、司がいるとは思ってもみなかった。

「ばあちゃんの部屋で何してたの？」

司はもう一度理由を尋ねた。美智子の狼狽えた顔を、整った顔で鋭く見つめた。

「私は、何もっ！」

血の気の引いた顔で、必死に幸恵の部屋の秘密を隠そうとしていた。

「そう。でも、僕はこの部屋に用があるんだ。みちるに会いたくてさ」

少年とは思えない程の端正な顔で、司は美智子に微笑みかけた。その顔を見て、美智子は言葉を失った。

「地下室の錠の鍵、僕にくれる？」

美智子の手握られた鍵に視線を移した。その鍵があれば、みちるを救う事が出来る。それさえあれば……。

「あ、あの……これは、それは……」

震える両手で、美智子は鍵を握りしめた。掌がじっとりと汗ばんでいる。迫りくる司の視線から逃げるように俯いた。

「鍵を、お渡しする事はって、出来ません……」

司に対していつもは砕けた口調で話す美智子だが、混乱しているせいか、孝に話すように改まっていた。

「じゃあ、どうしてくれるの？ この事、父さんや叔父さんは知ってるのかな？」

司の言葉を飲み込みながら、美智子はゆっくりと呼吸を整えた。

「……錠を外しておきます」

美智子のその言葉に、司は自然に笑みが零れた。

「うん、それでいいよ。じゃあ、今日からそうしておいてね」

司は子供のように、美智子に笑いかけ、閉めたばかりの錠を外させた。

みちるに会う前に、知っておく必要があった。何故、あんなところに閉じ込められているのか。居間に移り、美智子は知っている事全てを司に話した。

「一年前に訪れた孤児院で、あの子を見つけたそうなんです」

健康診断で訪れた小さな孤児院には、親に捨てられた、もしくは暴力を受けた子供たちが生活していた。その中に、幼いながら一際美しい子供がいた。それがみちるだった。

みちるは、育児放棄で何日も帰って来ない母親を狭いアパートでお腹を空かせてずっと待っていた。しかし、母親は帰って来なかった。何も食べていなかったみちるは衰弱し、玄関の外で倒れている所を保護された。その一方で、男に溺れた母親はみちるを捨ててアパートに帰らずに、男の住処に入り浸っていた。

その話を孤児院の側から聞いた孝は、みちるを引き取る事にした。スタッフ達も、信頼ある病院の院長からの申し出を断るはずもなかった。

「その日の内に、旦那様はあの子を連れて帰って来たんです」

そんな悲劇の中で育ったみちるを、コンクリートに覆われた冷たい所に放り込んだ理由が、司には分からなかった。

「何であんな地下室にみちるを……」

「それは……」

美智子は言葉を濁した。その様子を、司は逃さなかった。

「じいちゃんがそうさせたんでしょ？ でも、その理由は何？ 僕はこの家に地下室があるなんて知らなかった。みちるのために造ったんだよね？」

司の聡さには敵わないと思った美智子は、静かに秘密を打ち明けた。

「あの子を見た瞬間、旦那様はこう思ったそうです。『魔性がある』と」

まだ六歳という幼い身体の内奥に、息を潜めた魔性がある。孝はそれを感じた。だから、みちるを孤児院から引き離し、淵上という檻に入れて監視をする事にした。みちるの身の上を聞いて同情したのは建前だった。

「魔性……？」

「私はもちろん反対致しました！ 幼い上に傷ついたあの子に、そんな仕打ちは酷過ぎると……。ですが、旦那様は聞き入れては下さいませんでした」

閉じ込めるなら、せめて食事だけでも自分が運ぶと美智子は必死で懇願したと打ち明けた。それ以来、鍵の管理やみちるの世話は美智子がやっていた。そんな美智子を、孝はずっと監視してる。

「大体の事は分かった。美智子さんは、みちるの事を可哀そうだと思っているんだよね？」

「ええっそれはもう！ あんな所に閉じ込めるだなんて……」

「それなら、僕は毎日みちるに会いに来るから。そう約束したし。いずれ、みちるを救い出す」
そう言い、司は幸恵の部屋に向かい地下室に消えて行った。

「みちる、司だよ」

錠の外れた扉を開いて、薄明かりの冷たい部屋に声を掛けた。

「つかさ！」

扉が開くなり、みちるは司に抱き付いた。柔らかくにウェーブした髪が、ふわりと宙を舞った。

「いい子にしてた？」

六歳にしては小さな身体を、司は優しく包み込んだ。そして、同じ目線の位置にしゃがみ込んだ。大きな瞳が司を捉えた。

「いいこだよ！ ごはんぜんぶたべたもん！」

満面の笑みが、司の身体を熱くさせた。みちるの頬を撫で、もう一度抱きしめた。

美智子の言った『魔性』という言葉が、司の頭を巡った。みちるから放たれる雰囲気は、孝の感じた『魔性』なのかもしれない。だが、まだ十五歳の司には本当の意味は分からなかった。

次の日もまた次の日も、司は毎日みちるに会いに行った。会いたくて堪らなかった。あの冷たい地下室に咲く小さなみちるを抱きしめたい。そう思わずにはいられなかった。そして、その度にみちるは嬉しそうに司に笑顔を向けた。

早くこんなコンクリートの部屋から出してあげたい。司の願いはそれが全てだった。

今、何時だろう。コンクリートの冷たい部屋を見渡しても、時計の一つも見当たらなかった。みちるには、時の流れを把握する術がなかった。否、与えられなかった。それでも、美智子が運んでくる食事でなんとなく朝なのか、昼なのか、夜なのかと漠然と知る事は出来た。

誰かを待ち焦がれる日が来るなんて、みちるは思いもしなかった。あの日、母親に捨てられた瞬間から、みちるはひとりぼっちだった。

ひとりぼっちには慣れている。そのはずだった。

幼い感情は、閉じ込められたその時に決壊した。

こわい。こわい。こわい。

誰も助けてくれないと分かっているけど、泣き叫ぶしか出来なかった。このまま、死んでしまうのだろうか、と思った。

みちるに希望を与えた魔法の言葉――必ず出してあげる。

司はいつ来るのだろう。早く、会いたい。いつかここから出られる日がきっと来る。そう思うと、幸せで体中が温かくなった。

3.

毎日通った桜並木は、もう四回目の満開を迎えた。

「みちる、これ何だと思う？」

司はジャケットのポケットから、掌に収まる位の小瓶を取り出してみちるに見せた。

「なあに？」

小さな頭を傾げながら、小瓶をじっと見つめた。そして、あっ、と声を上げた。

「分かった！ アリスのドリンクだ！ それ飲むと、小さくなるんでしょ？」

大きな瞳を輝かせながら、そう答えた。みちるの子供らしい答えに、司はくすりと頬を緩ませた。

「みちるは可愛いな」

おいで、と両手を広げてみちるを膝の上に招いた。

「違うの？」

膝の上にちょこんと乗りながら、司の顔を見上げた。

「これを飲んでも小さくはなれないよ。それよりも、もっといい事が起こるよ」

みちるのウェーブのかかった髪を撫でながら、小瓶をポケットに仕舞った。

「いい事ってなあに？」

「ここからみちるをもうすぐ出してあげられる。それで、僕達がずっと一緒に暮らせるようになるんだよ」

みちるは司のジャケットにしがみ付いて、瞳を見開いた。

「それ、本当？」

「本当だよ」

「それ、みちるが飲む！」

「これは、みちるや僕が飲む物じゃないんだ」

「じゃあ、誰が飲むの？」

「内緒だよ」

司はくすりと笑った。

「ずるい！ みちるにも教えてよ！」

「その内、分かるよ。さあ、勉強の続きをしよう」

「……はい」

みちるは渋々算数の教科書に目を移した。

地下室から出られないみちるに、司は勉強を教えていた。教科書は全て司が使っていた時の物だった。おかげで、みちるはたくさんの事を学び、漢字も書けるようになり、計算も出来るようになった。

みちるを育てたのは、司だった。司以外に、みちるを愛している者はいない。みちるの為だったら、悪魔にでも鬼にでもなる。

やっとこの日が来た。司は、ポケット越しに小瓶を触った。

これで、ようやく願いが叶う。

みちるは僕だけの愛しい存在。誰にも渡しはしない。

司はみちるを抱き締めて、柔らかな頬に口付けをした。それは、まるで誓いのようだった。

もうすぐ出してあげると告げてから半年後、祖父孝は旅立った。健康にはいつも気を使っていた孝は肺を患い、あっという間に食欲が落ちて痩せ細っていった。

「みちるの事は、僕に任せて」

そう伝えると、孝は一瞬目を見開いて驚いていたが、うんと頷いた。そして、眠るように逝った。

4.

みちるに出会ってから十年が経った。幼かったみちるは十六歳になり、司は淵上の家の主になった。

「ただいま」

玄関の扉を開けて声を掛けた。いつもなら廊下を走って来て「おかえりなさい」と飛んで来るのに、今日はそんなみちるの姿はなかった。

「みちる？」

ネクタイを緩めながらギシギシと音の鳴る廊下を歩き居間に向かったが、みちるの姿はなかった。台所も客間も探したがみちるはいなかった。

「どこだ？」

もう寝てしまったのかと二階に上がり、みちるの部屋を覗いたが姿はなかった。それならば書斎かもしれないと思い、司はみちるの部屋を出た。

「……ここにもいない」

みちるはいなかった。もちろん、司の部屋にもいない。しかし、ひとつだけまだ見ていない部屋があった。

不安を押さえるように、司は祖母幸恵の部屋に向かった。襖に手を掛け、ゆっくりと開けた。部屋の隅、半畳に隠された秘密の扉。それが、開いていた。その先の闇に飲まれた階段を、司は見つめた。そして、その中にゆっくりと落ちて行った。

何故、今さらこの部屋が開いているのか。

あの頃と変わらない重厚な扉が、目の前でその存在感を強く放っていた。そして、錠は外され、扉が少しだけ開いていた。

「みちる、いるのか？」

重い扉を押し開いて、コンクリートの部屋に一步入った。

冷たい床に、みちるは丸まって蹲っていた。

「みちる！」

咄嗟にみちるを抱き起した。その体は、柔らかくて温かかった。

「……司？」

目を擦りながら、みつるは司の首に腕を絡めた。

「おかえりなさい……」

「……寝てたのか？」

起きたみちるを見て安心した司は、コンクリートの床に座り込んだ。

「ん……司待ってたら、眠くなったの」

みちるの湿った息が首筋に掛かった。まだ眠気が残る体が、司に体重を預けている。まだ大人になりきれしていない少年の残る柔らかな感触が、身体の芯を疼かせる。

「何でこんな所にいるんだ……。寝るなら部屋で寝なさい」

「ん……」

夢現(ゆめうつ)の中、みちるはか細く返事をした。そして、いつもの癖で司のネクタイを外した。

「.....寝ぼけてるくせに」

その様子を見つめて、微笑ましくもあり、くすぐったくもあった。

そのまま眠ってしまったみちるを抱きかかえて、部屋に向かった。

もう、地下室には来ないと思っていた。あんなに冷たく淋しいコンクリートの部屋。

みちるに何かあったのだろうか。

司は、無防備に眠ったみちるを見つめて不安を抱いた。

翌日も、帰りが遅くなり夜も更けた頃に家路に着いた。

「ただいま……」

みちるの姿はなかった。

司はそのまま幸恵の部屋に行き、地下室へ降りた。扉にはしっかりと錠がしてあった。それは、昨日司が締めたままだった。みちるはここにはいない。

少しの安堵を胸に、司は全ての部屋を見て回った。

「……今日はここか」

みちるは、書斎のソファで眠っていた。みちるを見つけた事に安堵して、司は漸く(ようやく)ネクタイを外してスーツを脱いだ。

「いろんな所で眠って、まるで猫だな」

眠っているみちるの頬を撫でた。柔らかな頬は、熱を帯びている。

「司……？」

頬を撫でる手に、みちるは自分の手を重ねた。

「起こしたか？」

開き切っていない瞳を司に向け、ゆっくりと身体を起こしソファの背に凭れ掛かった。

「昨日も言っただろ？ 眠いなら、部屋で寝なさい」

みちるの柔らかな髪を撫でて、部屋に行くようにと促した。けれども、みちるはソファから動こうとはしなかった。

「みちる？」

司はみちるの顔を覗き込み、額に掌を乗せた。

「具合でも悪いのか？」

みちるは、さっきから何も言わないで俯いていた。

「何か言ってくれないと分からないだろ？」

みちるの隣に座り、何か言うのを待っていた。そして、沈黙は破られた。

「……結婚なんて、しないで」

「え？」

みちるは、大きな瞳を司に向けた。

「結婚なんてしないで！ 司はずっと僕といてくれるって約束した！」

大きな瞳がゆらりと揺れた。いつの間にか涙が溜まっていて、今にも零れてしまいそうだった。

「結婚って……誰から聞いたんだ？」

一週間前から結婚の話が持ち上がっていた。それは、父豊からの見合いの話だった。もちろん断った。だから、司の中では終わった話だった。なのに、何故みちるがその話を知っているのか。

「美智子さんが言ってた……。大病院のご令嬢で、美人で上品でって……」

みちるの様子がおかしかった原因は、司の結婚話だった。しかも、今でも家政婦をしている美智子から聞いたのだ。

「何だ、それで拗ねてたのか？」

司は溜息を吐いた。

美智子はきっと豊から聞いたのだろう。美智子は世間話のようにみちるに話した。それがみちるにとって爆弾とも思わずに。

「結婚なんて、しない」

みちるは、ソファに凭れ掛かった司を見つめた。

「……本当？」

「ああ、本当だよ。その話は断ったんだ」

頬を伝った涙をそっと拭った。

「よかった……」

司の肩に頭を乗せた。強張っていた身体から力が抜けて、しなやかに司に凭れ掛かった。

「司がいなくなったら、生きていけない。僕は、司以外何もいない」

みちるの言葉は独り言のように流れた。

「それは俺も一緒だよ。みちるがいるから生きていける」

肩からふわりと重さがなくなった。そして、みちるの唇が触れた。

「みちる……」

「好き。司が好き」

みちるは司の胸に顔を埋めた。その愛しい姿に、司は身体の芯が熱を帯びるのを感じた。そして、理性ではもう押し潰せないと分かっていた。

いつか聞いた『魔性』という言葉が脳に響く。男であるみちるから漂う色香はそれだった。司はもうみちるに囚われている。

だとしても、そんなものはどうでもよかった。

「……みちる、顔をあげてごらん」

そう言って、司はみちるの頤(おとがい)に手を掛けた。美しく色付いた紅い唇をそっと撫で、そして口付けをした。

待っていた。望んでいた。みちるの全てを自分のものにしたい。この日が来るのを、ずっと願っていた。

もう、押さえられない。

「ん……」

みちるは短く声を漏らした。薄く開いた唇に舌を絡め、更に唇を重ねて激しく食った。

「みちる、愛してる」

その言葉に、みちるは返事のように司の首筋に腕を回した。

「うん。僕も、愛してる」

華奢なみちるの身体を、抱き締めた。折れてしまいそうな儚さだったけれど、司は力を込めた。

「ずっと……こうして欲しかった」

消えてしまいそうな声で、みちるは呟いた。

「抱いて……。司が、欲しい……」

司はしがみ付くみちるを抱きかかえて寝室に向かった。ベッドに座らせて、みちるの着ている服をゆっくりと脱がした。露わになったみちるの体は、陶器のように白く美しかった。

「綺麗だ……」

司は透き通るような白く薄い胸に顔を埋めた。そして、薄紅の胸の果実を指先で撫でた。

「あ……」

湿った声が漏れる。

小さく尖った愛らしい薄紅の実に、司は舌先を這わせた。そして、ねっとりと舌で愛した。

「あっ……ん……ん」

その吐息混じりの声が、司の芯を高ぶらせる。

司は、反応したみちるの芯を掌で包んだ。それを優しく上下に動かして可愛がった。その度に、みちるは小さく身体を震わせた。

「はあっ……ああ……っ」

扱かれたみちるの芯から少しずつ蜜が溢れた。

「みちる……」

喘ぐみちるの唇を塞ぎ、互いの舌を絡ませる。

「んんっ」

ゆっくりとベッドに寝かせて、みちるの足を開いた。それから、膝に手を当てて持ち上げた。

「あっ、司……。やだ……」

「何で？ 恥ずかしいの？」

「うん……」

蕩けた身体を、みちるはくねらせて足を閉じようとした。逃げる足を掴まえて、司は自分の肩に乗せた。

「みちる、逃げないで。ちゃんと見せて……」

司はみちるの秘所に顔を沈め、熱を帯びた芯を口に含んだ。唾液を絡ませて筋を舐め、啜っては出した。

「あっああっ……ん」

ぶるりと身体を震わせ、みちるは顔を反らせた。その美しい曲線は、司を欲情させた。

「みちる、ベッドに伏せてごらん」

「ん……こう？」

「そう。そうしてて……」

枕をみちるの身体に差し入れて、細い腰を引き寄せた。白くしっとりとした双丘の奥、まだ開花していない蕾を露わにした。固く締まっている蕾に、生気を与えるように舌を入れた。

「あっ！ つ、つかさあ……はう……っ」

十分に潤した蕾に、指を差し入れた。ゆっくりと出し入れを繰り返すうちに、徐々に蕾は綻んでいった。そして蕾の奥をまさぐり、司は開花を待った。

「ああっ！」

みちるの身体がビクンと跳ね、震え続けた。

「ここ？」

探り当てたみちるの快感の核を、司は指で刺激を与えた。それに応えて、みちるは息を漏らして喘いだ。

「あ、あっ！ やあ……ああ……っ」

みちるの芯が蜜を滴らせた。快樂の波は、みちるを淫らにさせる。

「みちる……入れるよ」

司は固く隆起した己に手を当てて、みちるの秘所に当てた。それをゆっくりと沈め根元まで突き挿した。熱を持ったみちるの中を、何度も深く抽送した。

「はっあっ、あああーっ！」

みちるの背中が仰け反り、官能の痺れに耐えきれずみちるの芯は白い蜜を溢れさせた。シーツにしがみ付き身体を痙攣されるみちるを引き寄せ、司はみちるの核を強く突き上げた。そして、みちるの中に熱い快樂のとろみを放った。

「んんっあ、ああっ！」

艶めかしく悶えて、みちるは喘いだ。快感が身体を酔わせた。それは、まるで夢の中にいるみたいだった。意識が曖昧になり、しがみ付いていたシーツも力が抜けて掌から離れていた。

「司……」

「みちる、おいで」

火照ったみちるの身体を引き寄せ抱き締めた。まだ、微かに身体を震わせていた。司は、腕の中で蕩けたみちるに唇を寄せた。

「みちる……愛してる」

それに応えるように、みちるは司の首に腕を伸ばした。

「司……愛してる。だから、愛して……ずっと、ずっと……」

司の肩越しに、みちるは吐息まじりに微笑んだ。禁断の果実のように、甘美な香りを残して。

あの日、地下室で子猫のように蹲っていた幼子はこの腕の中にある。

誰にも触れさせはしない。

司は、みちるの頬に優しく口付けをした。それは幼い頃にした、誓いのようだった。

永遠を誓う、甘美な口付け。